

砺波総合病院
から

産婦人科
稲坂 淳

市立砺波総合病院
☎32-3320

病院のホームページもご覧ください。

無痛分娩とは？

分娩出産の痛みは、陣痛の一言で済ませられることも多いのですが、妊婦さんたちの乗り越えなくてはならない大きな壁の一つとなっています。分娩出産の痛みは、子宮が収縮する痛み(陣痛)であり、赤ちゃんが産道(子宮の出口や膣、骨盤)を広げる痛みでもあるわけです。出産時の痛みは必要なのか。実はこれはなかなか難しいところですよ。おなかを痛めたからこそ赤ちゃんへの愛情が芽生え、そのために必死で出産の痛みを乗り越えるといった考えもあるからです。

海外では、アメリカで6割、イギリスで3割、フランスで8割もの妊婦が無痛分娩を受けているそうです。さらに、医療保険でもカバーされるまでに

なっています。ちなみに私が以前2年間働いていた新横浜の病院では、年間1千件程度のお産のうち30〜40%の妊婦さんは無痛分娩を希望し、大きな問題もなく無痛分娩で出産していました。実際に日本全体では、2010年度に厚生労働省研究班がまとめた調査によると、全国1176施設で無痛分娩の割合は26%だそうです。多くの方が無痛分娩を必要としていると思いますが、まだまだ、無痛分娩が身近にはなっていないようです。

どんな方法で無痛分娩するの？

分娩出産の痛みをやわらげる方法の中で、最も効果的な方法が硬膜外麻酔による無痛分娩です。これは硬膜外腔に留置したカテーテル(くだ)によって局所麻酔薬などの痛み止めを投与する方法です。(背中の背骨のそばから細い管を留置してそこから麻酔のお薬を入れるのです。管を入れていても麻酔を強くしないかぎりは、歩いたりご飯を食べたりもできます。)この硬膜外麻酔を用いてお産の痛みをやわらげることと硬膜外無痛分娩といえます。

無痛分娩を行うことは、何か分娩自体が普通と全く違うものとなってしまいう印象を与えます。確かに、昔に行われていた妊婦の意識をなくしてしまうような全身麻酔法では、妊婦にとってお産は全く別物となるであろうし、産科医にとっても特殊な分娩だったことでしょう。しかし、意識をしっかり保つことのできる硬膜外麻酔法による無

痛分娩は、痛み以外のすべての経過を妊婦さんは味わうことができるのです。

また、硬膜外麻酔は正しく行えば他の鎮痛法よりも母体にとって安全な方法となります。低濃度の局所麻酔薬を用いる現在の方法では、赤ちゃんに及ぼす影響も認めません。母体に過度な「いきみ」が生じないため、赤ちゃんにとっては無痛分娩の方が、ストレスが少ないと言っている先生もいます。

お産の痛みをやわらげてほしいという女性の要求に対する答えが、まさに無痛分娩といえるでしょう。お産が全く別物になってしまうわけではなく、お産はお産です。その妊婦さんのお産の自然な経過にできるだけ影響せずに、痛みだけを取り除く方法が硬膜外麻酔による無痛分娩なのです。



硬膜外無痛分娩が適している妊婦さん

- ・痛みや子宮収縮による心血管系への負担が望ましくない合併症を持っている妊婦さん
- ・分娩中に痛みにより力が入りすぎたり、無駄にいきんでしまったり、興奮状態になってしまつた妊婦さん
- ・夫にそばにいてほしいけれども、痛みに苦しんでいる姿を見せたくない妊婦さん
- ・高齢で体力に自信が無い方やお産の痛みを取り除いてほしいと思つている妊婦さん

硬膜外無痛分娩が適していない妊婦さん

- ・凝固・止血に異常のある妊婦さん(血が止まりにくい妊婦さん)
- ・全身及び穿刺部位の感染リスクの高い妊婦さん
- ・陣痛を経験して、乗り越えたいと考えている妊婦さん

無痛分娩についてご理解いただけただけでしょうか。当院では、無痛分娩は計画分娩になります。陣痛が来る前に、分娩する日を計画して、分娩を誘発する(つう)になります。

さらに詳しいことを知りたい方は、砺波総合病院産婦人科に、無痛分娩のパンフレットがありますので、参考にしてくださいと幸いです。



皆さんのお産がよりよいお産になるように、私たち砺波総合病院スタッフはがんばります。

ピンクリボンキャンペーン…砺波総合病院の催しにもご参加ください。